

【相談の経緯】

あなたは公立小学校の巡回相談心理士としてA小学校に訪問しています。初回訪問を終え、2回目にあたる訪問で、以下のケースについて助言することが求められました。今回のケースは、昨年度から担任が保護者と相談を重ね、保護者から特別支援教室の入室の希望がありました。現在、校内委員会での審議を経て、区市町村の教育委員会に入室申込書を提出しています。担任は、通常学級において実施可能な支援について、巡回相談心理士の助言を求めています。ですが、担任と予定が合わず、観察後に協議する時間はありません。そこで、担任に向けた助言レポートを作成することになりました。

【助言の内容】

担任からは、(1)対象児の算数の学習における困難さがなぜ生じているのか、(2)対象児にどのような長期及び短期の目標を設定したらよいのか、(3)目標に向けて、授業においてどのように支援したらよいかの3点の質問があがっています。効果的な支援につながるようなレポートを800字以内で記述してください。

なお、上記3点を記述する際、(1)困難さの背景、(2)長期及び短期目標案、(3)支援の手立て、と見出しを記してください。不足している情報がある場合は、今回の課題のケースに基づいて、各自で想像してください。

【通常学級担任(教職7年目・1年次も担任)から聞いた対象児の概要】

- 小学2年生の女子児童。
- 算数の困難さが顕著である。問題への意欲はあるものの、計算間違いが多く、繰り上がりのない一桁同士のたし算・引き算を間違えることがある。10までの足し算も指を使う。
- 教科書の読みにつかえることが多いが、時間をとれば最後まで読むことができる。
- 文章を読むのに精一杯で意味を理解することが難しいときがあるため、一人に一台あるタブレットで電子教科書の音声を聞く時間を設けている。
- 文を書くときに何もないと文字を思い出すことが難しいため、ひらがなとカタカナが対応した50音表を机の横にかけている(本児に限らず、自ら必要だと思った児童も)。文を考えて書くときには、本人に一度、何を思ったかを聞いて、見本となる文を担任が書いている。
- 大人しい性格で、休み時間は友だちと絵を描いている。アニメのキャラクターを細部まで特徴を捉えて描くことができている。友だちも本児の絵を楽しみにしている。
- 母子家庭で、上に小学5年の兄がいる。本児が年中児のときに父親と死別している。母親は家計を支えるために、非常勤を掛け持ちしていたという。
- 保育所からの指導要録には、量を限定して担任が近くで声をかければ、文字や数のワークブックに興味を持ち始めていることが記されていた。
- 説明の聞き漏らしや忘れ物があるが、保護者も持ち物を確認してくれている。
- 先月に教育センターで行った心理検査の結果は以下の通りであった。
WISC-IV FSIQ:94、VCI:103、PRI:101、WMI:80、PSI:83であった。

【行動観察結果】

算数において、長さの単元を扱う授業を観察した。授業の展開は、(1)クラス全体で大きさの異なる3匹の魚の写真を見て長さの比べ方を考える活動、(2)身近なものを使って長さの表し方を考える活動、(3)皆が同じものを使って長さを測る活動で構成されていた。以下に観察において特徴的であったことを記す。

(1)長さの比べ方を考える場面

担任が図1のように魚の写真を黒板に掲示し、クラス全員に対して「1番長い魚」を質問した。本児は、他児と同じ速さで挙手をした。担任が指名すると「ウの魚」と答え、他児童からも「そうだと思います」とフィードバックを受けていた。

担任が一斉に2番目に長い魚について質問した際も、他児と同じタイミングで挙手をした。その後、担任は図2のように写真を並び替え、長さを比べる質問をした。魚イに2の数字を書き、「イが2の長さだとすると、魚アの長さはいくつ？」と質問した。対象児は周囲を見渡し、他の児童が挙手をしている中、少し時間が経ってから、自信が無さそうに挙手した。対象児の他にも5,6名は挙手に自信が無さそうだったが、他の児童が「3くらい」「4くらい」と答えると、次の「ウの魚」では、高く手を挙げる児童が増えた。一方、対象児は依然として、周囲を気にして低い高さに挙げていた。

その後、担任は「ながさをはかってみよう」と本時のめあてを記入した。

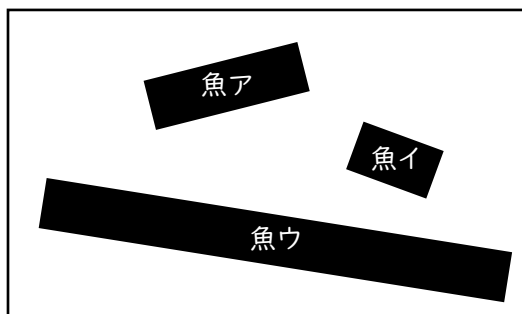


図1 魚の写真イメージ

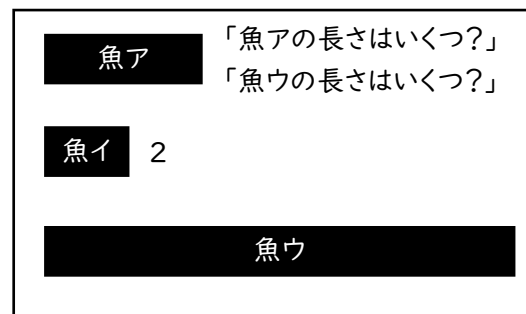


図2 魚の長さ比べ

(2)長さの表し方を考える場面

担任が「1年生のときに、どんな方法を使って長さを測りましたか？」と質問した。対象児は挙手せずに、他の児童が「鉛筆」「消しゴム」「紙テープ」と答える姿に注目していた。その後、担任がペアで「鉛筆」「消しゴム」「紙テープ」など、持っているものを使い、3匹の魚の長さ(任意単位)を測るように伝えた。

対象児とペアの児童は積極的な児童で、対象児に「何がいいかな？」と聞いた。対象児は机上を見て、「消しゴム」と答えた。ペア児童は「消しゴムなら私も持っている」と言い、消しゴムを使って、2人でワークシート上の魚の長さを測った。消しゴムで任意単位を測る際、対象児は魚ウの上にペア児童と対象児の消しゴムを置いて、1個分の箇所に印を書いた。印の数を「いち、に、さん、よん」と数え、合計を4と書いた。しかし、消しゴムの大きさはバラバラであ

り、ペア児童から「でも、消しゴムの大きさが違うね」と、算数セットのブロックを提案された。ペア児童が算数セットのブロックを置いて、魚ウを数える際に、対象児も声を出して「いち、に、さん、よん、ご、ろく、はち、きゅう」と数えた。

ワークシートに“なにが”“いくつ”あったのかを書く際、対象児は魚アや魚イはペア児童を見ずに、それぞれ“4こ”“2こ”と書いた。魚ウの長さを書く際には、ペア児童が書いたワークシートを見て“8こ”と書いた。

(3) 同じもので長さを測る場面

ペア学習が一段落したあと、担任は魚ウを何で測ったのか、いくつぶんあったのかを質問した。それぞれのペアが発表し、鉛筆では2本分や1本分とちょっと、消しゴムでは3個分や4個分、ブロックでは8個分などの意見があがった。担任は「どうして鉛筆や消しゴムは人によって違う数なのかな?」と質問した。対象児は他の児童と同じタイミングで挙手した。指名はされなかったものの、他の児童が「鉛筆の大きさが違うからです」という意見に対して、「同じです」と答えた。

担任は最終的に図3のようにブロックを黒板に貼り、クラス皆が持っている、同じ大きさのもので測ると同じ長さになることを確認した。そして本時のまとめを図4のように板書し、クラス全員で読み上げてから、算数ノートの新しい行に書くように説明した。児童のノートを見ると、14マスノートを使っていた。対象児は、一番前の席に座り、1文字ずつ見てノートを書いていた。漢字を書く際には、1文字を書くのに何度も見返していた。クラスの8割の児童がノートを書き終えたとき、対象児は約半分のところであった。担任は書き終えた児童に、「ブロックの他に、同じ大きさのものは何があるかを考えて、ノートに書いてね。明日の算数の時間に教えてね」と伝えた。終業の時間になるころ、対象児はまとめを書き終えることができた。

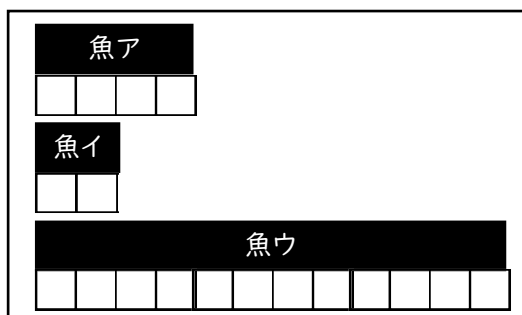


図3 ブロックによる任意単位

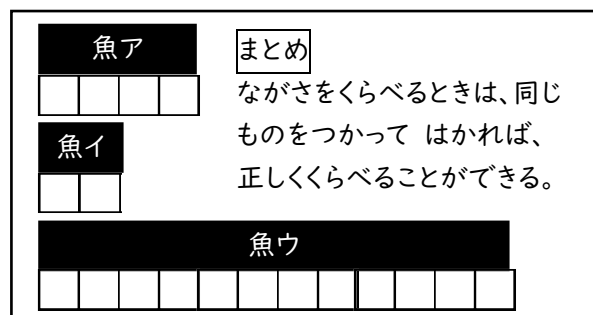


図4 本時のまとめ

(備考) ノートの見開きのページに書かれていた筆算

	1	2
+		4
<hr/>		
	1	6

	1	7
+		4
<hr/>		
	1	1